

捕虜たちの声なき声に耳を傾けて(6) 2019

英連邦墓地はいつも深い緑と静寂に包まれています。整然と並ぶ1800余りの墓碑の1つ1つに様々な生と死のドラマが秘められています。私たちは、遠い異国で無念の死を遂げた捕虜たちの声なき声を聴き取ろうと長年調査をしてきました。今回はその中から3つのご紹介をします。

(2019.8.3 POW研究会 田村佳子&笹本妙子)

■イギリス区NフロットD列8 Raymond C. W. Suttle 1943年12月23日死亡 23歳

2017年秋、イギリスからやってきたポール・マレー氏は Suttle サトルの墓碑にポピーの十字架を捧げ、しばし涙に泣いていました。彼の父フランシス・マレー少佐は、北海道の室蘭収容所でサトルを看取った前任将校兼軍医だったのです。



Raymond C. Suttle

北国の厳しい気候、製鉄所での過酷な労働、食べ物や医薬品の欠乏などで、この収容所では53人もの捕虜が死亡しましたが、とりわけサトルの死は悲劇的でした。マレー少佐の宣誓供述書にはこう書かれています——「サフォーク第4部隊のレイモンド・サトル兵卒は、1943年12月18日、炊事場から魚一切れを盗み出したため10日間の営倉入りの懲罰を受けた。彼は

真冬にもかかわらず毛布なしで営倉に入れられ、医療手当も受けられなかった。12月23日、彼は瀕死の状態から出された。足が(凍傷で)壊疽になり、文字通り凍死寸前で、病舎に入って1時間後に死亡した。これは所長の責任であった」。日本側の公式記録には彼の死因は「クループ肺炎」と記されていますが、マレー少佐は「私は銃剣を突きつけられ、(自分が書いた)診断書の死因を削除させられた」と日記に書いています。

責任があるとされた収容所長は戦後、戦犯裁判にかけられました。11日間にわたった公判の最後の日、弁護側の最終弁論の後で、主席検察官が被告の死刑を願うサトルの両親からの電報を読み上げました。軍事委員会が下した判決は絞首刑。所長は大阪外語学校(のちの大阪外語大学)でフランス語を学び、控えめで温厚な人物として知られていました。故郷の人々は彼を救おうと、100通近い助命嘆願書を提出しましたが、運命を変えることはできませんでした。サトルは23歳、収容所長は28歳でした。

■イギリス区JフロットB列11 Ernest William Mack 1943年6月29日死亡 36歳

この横浜の英連邦軍墓地で唯一の南アフリカ出身(ケープタウン)の兵士 Mack の兵歴を知ることは困難を極めました。彼に関する記述を載せた生還捕虜の回想録を偶然手にし、ようやく判明しました。が、未だ遺族が見つからない為、南アの国花をここに掲げて彼を顕彰します。



南アの国花プロテア

イギリス国籍を持つ Mack マックは戦前からマレー半島で仕事をし、その傍らマレー義勇軍に所属、戦争勃発でシンガポールに赴き、イギリス空軍少尉として活躍。後に空軍部隊と共にジャワに逃れましたが、1942年3月8日、オランダ軍降伏と共に日本軍の捕虜となりました。10月半ば、「しんがぼーる丸」でシンガポールに送られ、30日までチャンギに滞在した後、東福丸に乗船、「しんが

ぼーる丸」、大日丸と共に台湾を経て日本に移送されました。11月25日、門司港到着時、船倉は赤痢、コレラ、熱帯性潰瘍、脚気等の病人で溢れ、大勢が死に絶えていました。マックも健康状態は良好では無いまま、列車に乗せられ、11月29日長野県の満島に到着しました。

捕虜達は天竜ダムの建設に駆り出され、死者の数が増えて行きました。カナダ人捕虜の Les Chater レス・チャターは1943年6月29日の日記に「マックが徐々に弱り死亡。到着時から下痢を患っていた。死亡者数、現在74」と書き留めています。(実際のこの収容所の死者は59名。捕虜になってからの累計数でしょうか?—POW研究会)

捕虜に過酷な労働を強いたこの平岡(満島)の東京第12分所では、戦後の戦争裁判で6名が死刑となりました。

■オーストラリア区FブロットA列5-6 James Ronald Sewell 1947年10月15日死亡 31歳

第二次世界大戦後すぐ、米国など連合軍側は治安維持と武器回収を主目的に日本に進駐しました。英、豪、ニュージーランド、インド軍はBCOF(British Commonwealth Occupation Force)と呼ばれ、豪軍は最初恵比寿に駐屯、その後、呉に行き、島根、山口、鳥取、岡山、広島、四国全域を任されました。米軍の指導の下、第10爆発物処理部隊が豪軍に結成され、武器弾薬、化学兵器、機雷等の処理という最も危険で過酷な任務に就きました。



James Ronald Sewell

1946年10月22日、大那沙美島(広島県江田市)にて56名で作業中、船に載せた83トンの弾薬が突然発火爆発し、19歳のスミス工兵(Frank James Smith)は爆風で砂浜にたたき付けられ死亡(墓石ED8)、両鼓膜をやられ、頭にひどい怪我を負ったシーウェル(Sewell)は大やけどした大勢の日本人作業員達を献身的に救助し、スミスの遺体を回収、その後、本部に報告に向かいました。日本人達による「シーウェル軍曹のこの勇敢な行為が無ければ、15名の犠牲数で済まなかったはずだ」との報告が残っています。

この功績により、シーウェルはGeorge Medal(GM)*を受章しました。しかし、翌1947年の10月15日、室戸海岸で機雷処理中、突然爆発、一緒に作業していたブラムリー工兵(Albert George Bramley)、30歳と共に吹き飛ばされ、両名は死亡しました。2人は墓地に合葬されています(FA5-6)。この時、日本人の見物人36人が巻き添えで死亡しました。

ブラムリーは2ヶ月前に休暇で両親に会ったばかりでした。またシーウェル死亡のニュースはラジオで本国に流れ、体調が悪かった母親はその直後に軍からの公電を手にした途端、倒れ込み、以後寝込んだままになりました。戦争が終わっても、このような戦後処理で命を失う人達のことを私達は覚えておきたいものです。

(*GM:英国、英連邦諸国で人命救助で極めて勇敢な行為をした人に与えられる勲章。英国王ジョージ6世がその名前に因んで1940年に制定したもの。)

※捕虜に関する情報は、POW研究会HPをご覧ください。<http://www.powresearch.jp/jp/index.html>